

「祈 禱 書」の 英 語

—— 結 婚 式 と 埋 葬 式 ——

田 中 美 輝 夫

祈禱書 (The Book of Common Prayer) は、英国教会 (Church of England) で使用する、法律で定められた典礼文 (儀式文) (liturgy) を集めたもの。現行の祈禱書は、Morning Prayer (早禱)、Evening Prayer (晩禱)、Creed of St. Athanasius (アタナシオ信経)、Litany (嘆願)、Prayers and Thanksgivings (諸祈禱・感謝)、Collects, Epistles, and Gospels (特禱・使徒書・福音書)、Holy Communion (聖ごん式)、Baptism (聖洗式)、Catechism (公会問答)、Confirmation (堅信式)、Solemnization of Matrimony (結婚式)、Visitation of the Sick (病者訪問式)、Communion of the Sick (病者聖ごん式)、Burial of the Dead (埋葬式)、Churching of Women (産後感謝式)、Commination (大斎さんげ式)、Psalms (詩篇) その他を含む。

英語の祈禱書は、英訳聖書と同じく、英国宗教改革の産物である。それ以前には英国の教会の礼拝はラテン語で行われていた。英国で行なわれたラテン語祈禱書は、ローマ教会の典礼文を部分的に修正したもの (“Uses” と呼ばれた) で、各地でまちまちであり、その間に統一はなかった。

1549年、Edward 6世の治世に、カンタベリー大司教 Cranmer を chief editor として一彼自身 Litany と Collects を翻訳した一見事な散文で書かれた英語祈禱書が初めて完成した (cf. Tyndale 訳新約聖書、1535年)。宗教改革前夜に最もよく知られそして最も広く用いられていた「ソールズベリー儀典」 (“Use of Sarum”) を中心にして、他の種類の祈禱書の内容を加え、統一整理したもの。これは現行の祈禱書と内容において大差はない。議会の協賛を得た The Act of Uniformity (祈禱方式統一令) (1509) は、すべての教会に対して “Common Prayer Book” を用い、共通の儀式を恪守することを義務づけた。

その後の引きつづく改訂 (1552, 1559, 1604, 1662) は、宗教改革が通過した段階を反映している。これらのうち最後の改訂 (1662) は、Charles 2世の王政復古に伴

って行なわれたもので、その色彩はカトリック的である。旧版の本体は変えられないまま残った。注意すべきは、Presbyterians の希望をいれて、使徒書、福音書その他の聖書の引用文を1611年の Authorized Version から採録したことである。ただし「詩篇」は欽定訳によらず、従来通りの Great Bible (1539-40) のものを踏襲した。「大聖書」の「詩篇」が祈祷書に収録されたのは、祈祷書作成当時 (1549年) において唯一の公式訳であったからであり、そして欽定訳によらず現在に至るまで変更されずにいるのは、この訳の方が歌いやすいためのものである。礼拝用として祈祷書の中におさめられているこの「詩篇」(Coverdale 訳) は、特に Psalter と呼ばれる。

その後実質的には殆んど変更を受けず、今日に至っている。近時、時代の要求に応じて祈祷書の語句・内容を修正しようとする試みがあり、修正案が1927年、1928年の両度議会で提出されたが、いずれも承認されなかった。

祈祷書は欽定訳聖書とともに英国人の宗教生活において重要な役割を果している。それが英語、特に日常英語に及ぼした影響は欽定訳聖書と比べると極めて少ないが、作家の文章には祈祷書からの引用句はしばしば見られる。

本稿は、祈祷書の中でも最も印象深い二つの典礼文、結婚式と埋葬式、について、そこから出たよく引用される成句のいくつかを考察することにする。

1. Solemnization of Matrimony (結婚式)

結婚の当日、新郎と新婦は神前に進み、祭壇に向って新郎は右、新婦は左に立ち、司祭の司会のもとに結婚の聖儀 (Holy Matrimony) が取り行われる。

司祭は、新郎・新婦にたいして結婚の意志の確認を行った後、次のように言う、

Who giveth the Woman to be married to this Man?

この男にめあわすために、この女をわたす者はたれか。

ここで親またはその代理者は新婦の右手をとって司祭にわたす。司祭は、受けて新郎に右手で新婦の右手をどらせ、新郎に次のように後について言わせる、

I N. take thee N. to my wedded wife, *to have and to hold* from this day forward, *for better for worse*, for richer for poorer. in sickness

and in health, to love and cherish, *till death us do part*, according to God's holy ordinance, and thereto I give thee my troth.

われ某(なにがし)、神の聖なる定めに従いて、汝某(なにがし)をめとる。今日よりのち、良きにつけ悪しきにつけ、富むにつけ貧しきにつけ、病める時も健やかなる時も、ゆくすえながくめとり、死が我ら二人を分つまで愛しいつくしむべし。われ今これを約す。

〔注〕日本聖公会「祈祷書」(改訂訳、1959年):

「われ神の定めに従ってなんじをめとる。今より後幸にも災にも、富にも貧しきにも、健やかなる時も病める時も、なんじを愛し、なんじを守り、生涯(〔旧訳〕死に至るまで)なんじを保つべし。われ今これを約す」。

(1) to have and to hold

To have and to hold = a phrase apparently of legal origin (cf. law L. *habendum et tenendum*: see HABENDUM), retained largely, as in German, Dutch, etc., on account of its alliterative form: To have (or receive) and keep or retain, indicating continuance of possession.

Beowulf (Z)659

Hafa nu and ge-heald husa selest.

(Have now and hold best of houses)

1549 *Bk. Com. Prayer, Matrimony*

I N. take thee N. to my wedded wife, *to haue and to holde* from this day forwarde.

— OED HAVE v. I. c.

〔例〕:

There were books of which I had passionate need, books more necessary to me than bodily nourishment. I could see them, of course, at the British Museum, but that was not at all the same thing as *having and holding* them, my property, on my own shelf. — G. Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft*, 'Spring', xii (1903).

私が欲しくてたまらなかった本、私にとっては身体の栄養よりもっと必要な本、そういう本がいく冊あった。勿論、大英博物館へ行けばそれは見ることができた。しかしそうすることは、自分のものとして自分の書架にそれを所有することとは、全く同じことではなかった。

成句 'have and hold' は「いつまでも自分のものとして持つ」(possess permanently)程の意。英和辞典には「保有する」(三省堂：College Crown 英和辞典、1964；岩波：英和大辞典、1970)、「領有(保有)する」(研究社：新簡約英和辞典、1956)などの訳語が与えられている。ただしその出所についてはいずれも触れていない。COD, UED (H. C. Wyld), 研究社：新英和大辞典(第4版、1960)にはこの成句は全然記録されていない。注目されるのは、1921年(大正10年)刊行の市河三喜注：George Gissing, *The Private Papers of Henry Ryecroft* (研究社、英文学双書)に早くも次の注があることである：

「having and holding 「自分の所有とする」。Common Prayer の Matrimony の所にある 'to have and to hold' という句が原である」

新郎が上述の誓約を終ると、こんどは新婦が司祭に従って誓約する。新婦の誓約は新郎と同じ文句であるが、一箇所だけ新郎と異なっている。夫たるべきものは妻を敬愛する (to love and to cherish) に対して、妻たるものは夫を敬愛し、かつ「服従」する (to love, cherish, and to obey) ことを誓うことになっている。ただし1927年の議会に提出された *The Book of Common Prayer* の修正案では、この誓約から「服従」の項が削除されていたが、この修正案は否決された。

日本聖公会の「祈祷書」は、新婦の誓約は「なんじを愛し、なんじを守り、なんじに従い」となって英国教会のそれに準じている。一方、日本のためのカトリック儀式書「結婚式」は新婦に新郎と同じ文句を誓わせる—「○○○○さん、わたくしはあなたを夫として迎えます。順境にあっても逆境にあっても、病気の時も健康の時も、妻として生涯愛と忠実を尽すことを誓います」。

最後に、I N. take thee N. to my wedded wife (husband) の N. について。N. というのは当該者の氏名をいれて読んだり話したりするところで、OED には次の説明がある (N I. 2)

N = Used to indicate that the name of a person is to be inserted by the reader or speaker.

14-- *Eng. Fragm. Med. Service-Bks. 6,*

I N. take thee N. to myn wedded wyf.

1552 *Bk. Com. Prayer, Priv. Baptism,*

Yf thou be not baptysed, N, I baptysse thee in the name of the
Father [etc.].

N. の起源については、OED は沈黙している。恐らくうっかりして失念したのであろう。N. は、もともと、ラテン語のカトリック儀式書「結婚式」(Ordo Celebrandi Matrimonii Sacramentum) に用いられている。

N. vis accipere N. hic praesentem in tuam legitimam uxorem iuxta ritum sanctae Matris Ecclesiae? — Volo.

某(なにがし)さん、尊き母なる教会の儀式に従って、ここにおられる某(なにがし)さんをあなたの妻といたしますか——いたします。

これは私見であるが、N. は多分ラテン語 *nōmen* ('name') の省略形であろう。

(2) for better for worse

For better for worse = Either in good or bad fortune; on terms of accepting all results (used where an issue is doubtful or beyond human control). Often misquoted as 'for better or (for) worse'.

OED (WORSE, *a.* and *sb.* B 3 a.) は次の用例をもつ。

1390 Gower *Conf.* 11. 24

For bet, for wers, for oght, for noght. Sche passeth nevere fro my thought.

a 1500 *Sarum Manuale, In sponsalibus* (Rouen 1501) fo. xlvii,

I N. take the N. to my wedded wif to haue and to holde for this day forward *for bettere for wers* for richere for pouerer.

[例] :

'A man's profession,' she said --- 'is not like his wife, which he must take once for all, *for better for worse*, without proof beforehand.'

— Samuel Butler, *The Way of All Flesh*, xxxv.

「男の人の職業は」と彼女は言った……「奥さんとはちがう。奥さんというものは、予めためしてもみないで、良きにつけ悪しきにつけ、一度きりしかもらえない」

"Poor Bessy," he said, "you was a pretty lass then --- everybody said so --- and I used to think you kept your good looks rarely. But you're sorely aged --- don't you bear me ill-will --- I meant to do well by you --- we promised one another *for better or for worse*."

— G. Eliot, *The Mill on the Floss*, BK III, Ch. VIII.

「可哀そうにベシィ」と彼 (Mr. Tulliver) は (Mrs. Tulliver に向って) 言った、「おまえはあの頃はかわいらしい娘だった——誰もみんなそう言っていた——そしておまえは世間に珍しく器量がいつまでも衰えない、と私はいつも思っていたものだ。しかしおまえもこの頃はすっかりふけてしまった——私をうらまないでくれ——おまえのためを思っていたことだ——わたしたちは良きにつけ悪しきにつけとお互に誓いあった仲だもの」。

成句 'for better for worse' は「よかれあしかれ、どんなことがあっても (行末ながく階老同穴の契りを結ぶ)」程の意。COD には 'on terms of accepting all results (see Prayer Book, Marriage Service)' とあり、UED には 'in good and bad fortune' という説明があるだけで、出所には言及しない。英和辞典にはどうなっているかをみると、研究社：新英和大辞典は「よかれあしかれ、いかなる運命になろうと行末永く (Prayer Book の結婚式の文句から)」、研究社：新簡約英和辞典には「よかれあしかれ、将来どういふ運命になろうとも (Prayer Book の結婚式の文句から)」、三省堂：College Crown 英和辞典「よくなっても悪くなっても、どういふ運命になろうとも (Prayer Book の Solemnization of Matrimony の文句から、岩波：英和大辞典「将来どうなろうと、どんなことがあっても (Prayer Book の結婚式の文句から)」など、さすがに「祈祷書」の中でも最もよく知られている文句だけに、いずれもその出所を明示している。

(3) till death us do part

この成句は、'do part' のところは1549年版では 'departe' であった。OED には次の説明がある。

Depart = +3. *trans.* To put asunder, sunder, separate, part. *Obs.*

1393 Gower *Conf.* 11. 129

That deth shuld us departe attwo.

(That death should us depart in two)

1548-9 (Mar.) *Bk. Com. Prayer, Matrimony,*

Till death vs *departe* [altd. 1662 to *do part*].

1601 Downf. Earl Huntington ll. ii. in *Hazl. Dodsley VIII.* 134

The world shall not *depart* us till we die.

a 1677 Barrow *Serm.* (1810) I. 199

The closest union here cannot last longer than till death us *depart*.

上例で見るところによると、この意味における 'depart' の最後の用例は1677年ころであり、その後用いられなくなった。

この 'depart' は1662年 Charles 2世の治世に行われた改訂で 'do part' に変えられた。この改変は Puritans の要請による。Brewer (*Dictionary of Phrase and Fable*) は 'Depart' の項において、「古い祈祷書の結婚式は "till death us depart" をもっていたが訛って (corrupted) "till death us do part" になった」と言い、ついで次の論評を引用している、

"Depart" is sound English for "part asunder," which was altered to "do part" in 1661, at the pressing request of the Puritans, who knew as little of the history of their national language as they did of that of their national Church. — J. H. Blunt, *Annotated Book of Common Prayer.*

"Depart" は "part asunder" (離れ離れに分ける) を意味する正しい英語であるが、1661年に清教徒のたつての要請によって 'do part' に変えられた。清教徒は自分たちの国の教会の歴史を殆んど知らなかったが、それと同じ位自分たちの国語の歴史を知らなかった。

[注] この改変について、E. Weekley (*An Etymological Dictionary of Modern English*) も ‘at request of Puritan divines’ (see DEPART) と付言している。

Puritans はどういふわけで ‘depart’ を嫌って ‘part’ を主張したのであろうか。当時 ‘depart’ という語は ‘part asunder’ の意味ではすでに obsolete 或は obsolescent であり、欽定訳 (1611年) がすでにルツ記において採用した ‘part’ (1:17 if ought but death *part* thee and me) に従う方を適切だと考えたためであろうか。

[例]:

All this time I have not told her, and up to this minute she believes that he has indeed taken her for better, for worse, *till death them do part*. — T. Hardy, *Alicia's Diary*, vii.

これまでずっと妹には話していない。だから今の今もあの子は思いこんでいる。「良きにつけ、悪きにつけ、死が二人を分つまでは」の誓い通り、あの方の妻になったものだと。

成句 ‘till death *us do part*’ は今はたいてい ‘till death *do us part*’ として引用される。ただし上例において Hardy は祈祷書の原文の語順通りに ‘till death *them do part*’ としている。ちなみに、研究社：英語引用句辞典には上記 Hardy の例を含めて13例が収められているが、‘till death *do us part*’ 型が10例、‘till death *us do part*’ 型が3例ある。参考までに分類して列挙すると、

(a) ‘till death *do us part*’ 型

He must take me for better for worse, till death *do us part* —
Shaw, *Back to Methuselah*, ii.

serious people sticking together until death *do us part* — Aldington,
The Colonel's Daughter, IV, iv.

'Till death *do us part*?' — Christie, *Evil under the Sun*, iii.

"Thine till death *do us part*," he said — G. D. H. and M. Cole, *Last Will and Testament*, xxiv.

until death *do us part* — Evening News.

For better for worse he is my husband, till divorce *do us part* — Dos Passos, *Manhattan Transfer*, II, i.

Till death *do you part*, that's wot the Bible says — Ervine, *Jane Clegg*, I.

You are his wife till death *do you part* — Wallace, *The Forger*, vi.

until not even obituary notices *do them part* — Pattridge, *A Dictionary of Cliches*, Preface.

till death *did them* finally join — Collier, *Tom's A-Cold*.

(b) 'till death *us do part*' 型

He was forced to admit a provision whereby a couple joined in holy matrimony could not contract out, even with adultery, until a stated period of time had elapsed — for better or for worse, until five years *us do part* — Muggeridge, *The Thirties in Great Britain*, V, viii.

Those who marry contract to have and to hold each other as husband and wife, for better or worse, etc., till death *them do part* — *Spectator*, April 23, 1937.

古い語順の (b) の型が今なお少数ながら用いられることについて、その理由はいろいろ考えられるが、一つにはその場合祈祷書の原文についての筆者の意識が強く働いているためであろうか。

このしばしば引用される成句について、多くの辞書は無関心である。UED が 'till death *us do part*' (Marriage Service) と記載しているほかは、COD をはじめ英和辞典は沈黙を守っている。

2. Burial of the Dead (埋葬式)

本題に入るに先だって、ヨーロッパのキリスト教国の葬送法について一言しておこう。

ヨーロッパでは古典時代から火葬 (cremation) と土葬 (inhumation) が並立して行われたが、中世になるとローマ教会は「肉体の復活」へのキリスト教的信仰のために火葬を厳禁した。そのため英国でも死体の処理は土葬 (埋葬) に限られていた。しかし19世紀後半になると衛生その他の理由から火葬論が盛んになり、1902年には Cremation Act が初めて議会を通過した。それにもかかわらず第2次大戦の終了までは前進は除々であったが、そのころになると需要に必要な土地を見つけることがむつかしく、埋葬制度を維持することは困難となった。かくして1950年ころまでには英国の全死亡者の三分の一が火葬によるようになった。それにしても、今日なお「埋葬」が英国の葬法の主流であることに変りはない。

〔注〕アジアで火葬が古くから行われたのはインドであり、火葬は主として仏教徒の採用した葬法である。したがって仏教文化の影響をこうむることの大きかったビルマ、日本などには早くから火葬の風習が伝えられている。日本では、記録によれば、700年(文武4年)に僧道昭が遺言してその遺体を火葬させたのが初見である。

司祭と教会役員は墓地の入口 (lychgate) で遺骸 (Corpse) を出迎え、そして行列の先頭に立って教会堂 (あるいは墓地) に行くとき、次の聖句 (John 11:25,26) を歌いあるいは唱える、

I am the resurrection, and the life, sayth the Lord : he that believeth in me, though he were dead, yet he shall live ; and whosoever liveth, and believeth in me, shall never die.

主言いたもう、我はよみがえりなり、命なり、我を信ずるものは死ぬとも生きん。おおよそ生きて我を信ずる者は、とこしえに死なざるべし。

堂内の儀式が終ると、一同は墓地に行く。遺骸が墓穴におろされる支度がされている間、司祭は唱える、あるいは司祭と教会役員は歌う、

Man that is born of a woman hath but a short time to live, and is full of misery. He cometh up, and is cut down, like a flower; he fleeth as it were a shadow, and never continueth in one stay.

In the midst of life we are in death.

女より生まれし者はそのいのち短かくして、なやみ多し、そのきたり散ること花のごとく、その飛び去ることげに影のごとくにしてとどまることなし。

生（いのち）のさなかにあつて、我ら死のなかにあり。

次いで傍に立つ者によって遺骸の上に土が投げられている間、司祭は唱える、

Forasmuch as it hath pleased Almighty God of his great mercy to take unto himself the soul of our dear (brother) here departed, we therefore commit (his) body to the ground; *earth to earth, ashes to ashes, dust to dust*; in *sure and certain* hope of the Resurrection to eternal life, through our Lord Jesus Christ.

全能の神、大いなるあわれみをもって、我らが愛するこの（兄弟）を召したまいたれば、今そのかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし、とこしえのいのちへのよみがえりを主イエス・キリストによりて堅く望む。

(1) *in the midst of life*

‘*In the midst of life*’ のなかの成句 ‘*in the midst of*’ は「～のさなかに、のただなかに」程の意。この句は比喩的に異質的、敵対的なものに「囲まれて」(surrounded by—POD) の意味に用いられる。例えば ‘*In the midst of plenty there is want*’ (*Random House Dictionary*) (豊かさのさなかに貧困がある)。

埋葬式の名句 ‘*In the midst of life we are in death*’ は通常全文のまま引用されるが、Ambrose Bierce は前半だけをとってその作品の題名とした —— *In the Midst of Life* (1892) 「生命のさなかに」。この26篇から成る短篇集は大部分が「死」を題材としている。ただし「生命のさなかに」とは「我ら死のなかにあり」である。この作品ははじめ *Tales of Soldiers and Civilians* (1891) となっていたが、翌

年現名に改題された。‘In the midst of life’ という paradoxical な表現はいかにも “Bitter” Bierce の好みに合いそうである。

この句を辞書はどう扱っているかという点、まず OED は MIDST の項に 1548-9 (Mar.) *Bk. Com. Prayer, Burial of Dead*,

In the myddest of lyfe we be in death.

とあり、英和辞典では

研究社：新簡約英和辞典

In the midst of life we are in death.

われら生(いのち)のなかばにも死に臨む (Prayer Book, “Burial Service”).

岩波：英和大辞典

In the midst of life we are in death.

われら生(いのち)のなかばにも死に臨む (*The Book of Common Prayer*).

上記英和辞典の訳語については、日本聖公会「祈祷書」の文句を参照：

「我ら、いのちの半ばにも死に臨む」

(2) earth to earth, ashes to ashes, dust to dust

‘Dust’ は「乾いた土」の意で、地表の細かい「ちり」を指す。人は「ちり」から出たものであるから、また「ちり」に帰る。cf. Gen. 2 : 7 And the Lord God formed man of *the dust of the ground* (主なる神は土のちりで人を造られた)。Gen. 3 : 19 For *dust* thou art, and unto *dust* shalt thou return (あなたは、ちりだから、ちりに帰る)。

‘Ashes’ は火葬の後に残る人体の「灰」ではなくて、‘dust of the ground’ (OED ASH sb² 5) の意である。ついでながら、Gray, *Elegy*, xxiii の

Eèn from the tomb the voice of Nature cries,

Eèn in our Ashes live their wonted Fires.

墓石の下よりも人情の声は叫び、

われらが灰のなかにも生前の火は生く。

という有名な句において、Ashes — Fires があざやかな修辭的效果をあげているが、Ashes とはギリシア・ローマの火葬の風習から起る古典的語法を単に模倣したもので、ここでは詩語として「土に埋められた遺骸」の意である。当時英国には火葬は行われ

なかった。cf. OED ASH (sb² 4) :

From the ancient custom of burning the bodies of the dead : that which remains of a human body after cremation or (by transferred use) total decomposition ; hence poet. for 'mortal remains, buried corpse.'

[例] :

At that simple, but most solemn consignment of the body to the grave --- "*Earth to earth — ashes to ashes — dust to dust*" --- the tears of the youthful companions of the deceased flowed unrestrained.

骸(なきがら)を墓穴にゆだねる — 「土を土に、灰を灰に、ちりをちりに」 — というあの素朴ではあるがこの上なく厳しゆくな条(くだり)になると、故人の年若い仲間たちの涙は抑えるすべもなく流れた。

なお、日本聖公会「祈祷書」の「葬送式」では、火葬法を主とする現在のわが国の風習を考慮して、次の但書が付け加えられている :

火葬の時には「今そのかばねを地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし」とあるのを「今そのかばねを火にゆだね」とし --- 遺骸埋葬の時には「今その遺骸を地にゆだね、土を土に、灰を灰に、ちりをちりにかえし」と言う。

(3) sure and certain (hope)

Sure and certain = absolutely certain or reliable.

山本忠雄：ディッケンズの英語(研究社、1951)のなかに、聖書と祈祷書の英語が Dickens の英語に及ぼした影響を述べた部分があるが、そこで 'sure and certain (hope)' の句に触れて、「此句を挙げているのはワイルド(H. C. Wyld) だけだが、広く使われている。ジョンソン(Boswell: *Life of Johnson*, 11 p. 490) は 'It is sure and certain hope, sir' という言葉を使っている」(p. 145) とある。

[注] UED (H. C. Wyld) SURE 3: Positively true, well authenticated as a fact, undoubted: *a sure and certain hope*. なお OED には 'sure and certain' の句は記録されていない。

ついで次の諸例が挙げられているが、この句にこれほどの注意を払ったのはわが国では同書が最初ではなかろうか。

in the *sure and certain hope* — Dickens, *Christmas Books*.

the *sure and certain* knowledge of it — *ibid.*

a *sure and certain* rest — Gaskell, *Right*.

so *sure and certain* — — in subtle choice of word and epithet — Wilde.
Intentions.

such *sure and certain* guidance — Gissing, *Private Papers*, Autumn XIII.

その後、研究社：英語引用句辞典（1950）には1例、研究社：英語イディオム辞典（1964）には3例が記録されている。英和辞典をみると

研究社：新簡約英和辞典（1955）

a *sure and certain hope*. (根拠ある) 確かな希望 (*Prayer Book* から)。

岩波：英和大辞典（1970）

sure and certain. 絶対確かな、極めて信頼できる (→ *Prayer Book* 'Burial of the Dead')。例としては、a *sure and certain hope* のほか「英語イディオム辞典」と同じ2例がのっている。

(49. 8. 28)